

境内案内 1（本殿、権殿、片山御子神社、新宮神社、大田神社、楼門）

本殿と権殿

上賀茂神社の本社の区域には、本殿（主な本殿）と権殿（一時的な本殿）と呼ばれる 2 つの社殿が並んでいます。賀茂別雷命大神は右側にある本殿に祀られており、大半の儀式がここで行われます。左側にある権殿は、本殿と全く同じ建物で、本殿で修理が行われている時、御祭神を一時的に祀るための場所として用意されています。

この 2 つの社殿は、流造と呼ばれる古典的な神社の建築様式で建てられています。流造は、非対称の切妻屋根が特徴です。本殿と権殿は、平安時代（794–1185）に一般的に見られた古い形式の流造の注目すべき例となっています。現在の本殿と権殿は 1863 年に建てられ、国宝に指定されています。

狛犬という伝説上の獣と唐獅子という獅子の像と絵画が、本殿と権殿を守っています。社殿の壁に描かれた狛犬の絵は元々、江戸時代（1603～1867）に傑出した有名な狩野派の絵師によって描かれました。

片山御子神社

片山御子神社（別名片岡社）は、上賀茂神社の境内にある 24 の摂末社の中で最も重要だと考えられています。ここでは、本殿（主な本殿）に祀られている賀茂別雷大神の母、賀茂玉依姫命を祀っています。賀茂玉依姫命は、愛の幸運、幸せな結婚、子授け、安産、そして家内安全の願いを聞き入ると信じられています。

賀茂玉依姫命を祀る神社が最初に建てられた日付は不明ですが、片山御子神社については、『延喜式』（10 世紀初頭の習慣と正式な手順をまとめ、その当時に現存した全 2,861 の神社のリストなども記載した）に記載されています。京都の多くの有力な公家などが賀茂玉依姫命を崇拝しました。その中には、『源氏物語』の作者である紫式部（973？～1014？）も含まれ、彼女は幸せな結婚を願うために片山御子神社を参拝しました。

片山御子神社は、楼門から小川を挟んだ向こう側にある小さな片岡山の麓にあります。拝殿の前の絵馬掛にはカラフルな絵馬が掛けられており、絵馬には、紫式部の絵と彼女が参拝した時に書いた詩がかかれています。詩はこのようなものです。「ほととぎす 声待つほどは 片岡の 森の雲に 立ちや濡れまし」

上賀茂神社の本殿（主な御殿）で賀茂別雷大神のための重要な恒例祭典が行われるとき、片山御子神社で神事を始めるのが習慣です。神の母への敬虔を表すため、本殿にいる神職は、外の摂社にいる神職からそこで儀式が始まったことを伝える合図があるまで、お祈りを始めません。

新宮神社

新宮神社は高竈神と呼ばれる龍神を祀っています。この神は、降雨、畑の灌漑、治水、水上での安全な旅、健康、そして若返りについての祈りを叶えると信じられています。この神社は上賀茂神社境内の北東側、本殿のすぐ近くにあります。この場所にあった社の建物についての初めての記載は、1048 年の上賀茂神社の記録に登場します。

新宮神社は、貴布禰神社としても知られており、その名前は高竈神信仰の元々の中心であった北の貴船町にあるより大きな貴船神社に由来しています。貴船町の貴船神社は、かつては上賀茂神社が管理する摂社でした。しかし、大雨や冬の雪の中で、神職がその町まで訪れることが困難であったため、江戸時代（1603～1867）のいつ頃かに高竈神は上賀茂神社の境内に祀られるようになりました。元々の貴船神社は 1871 年に独立しましたが、高竈神は現在に至るまで両方の場所で水神として祀られています。

新宮神社は毎月第 2・第 4 日曜日に公開されています。有料の祈願もあり、賀茂の舞と呼ばれる上賀茂神社特有の神楽が含まれます。この神楽を依頼した参拝者は、御幣（神聖な、垂らした紙の付いた串）のような形をしたお札ももらいます。

大田神社

大田神社は上賀茂神社から東に約 800 メートルの所に位置し、太陽の女神である天照大御神に関する有名な神話に登場する女神、天鈿女命を祀っています。天照大御神は、弟の素戔鳴尊に腹を立てて洞窟に閉じ込み、世界に終わりのない夜をもたらしました。他の神々は天照大御神に外へ戻るよう説得しようとしたが、その試みは全て失敗しました。最後に、天鈿女命がにぎやかな踊りを披露し、他の神々が歓声を上げたため、天照大御神が興味を惹かれて洞窟から出てきて、世界に太陽の光が戻りました。この神話から、天鈿女命は主に芸能上達を助ける神として祀られています。

神社として、大田神社は、上賀茂神社よりも古いと言われています。上賀茂神社を創設した賀茂氏が 6～7 世紀にこの地域に移住する前から、農民はこの場所にあった神社で幸運と長寿の神を祀りました。上賀茂神社が権力と影響力を増した後、大田神社はその摂社の一つになりました。

大田神社の境内にある大田ノ沢は、カキツバタで有名です。5 月中旬には、紫色の花がたくさん咲いて池全体を覆い、その景色が数えきれないほど多くの来場者を集めます。1945 年に、このカキツバタの池は天然記念物に指定されました。大田神社のカキツバタは何世紀にもわたって愛されており、いくつかの古代の記録や詩に登場しています。廷臣の藤原俊成（1114～1204）によって書かれた

特に有名な詩では、次のように詠まれています。「神山や 大田の沢のかきつばた ふかきたのみは 色に見ゆらむ」

大田神社の拝殿は、現存する最古の神楽（神聖な舞）である里神楽に使われています。里神楽は、鉦や太鼓による伴奏とともに行われます。鉦と太鼓の音を表す言葉は「チャン」と「ポン」で、そこから「チャンポン神楽」という別名が生まれました。里神楽は、里神楽は、毎月 10 日の夜に大田神社で行われる祈祷の一環として行われます。里神楽は京都市登録無形民俗文化財に指定されています。

楼門

楼門は上賀茂神社の本社の区域に通じており、最も重要な聖域がある神聖な空間への通路を象徴しています。2 階建ての構造や入母屋、魔や不幸から保護することを目的とした明るい朱色が特徴です。楼門が何年に最初に何建てられたのは不明ですが、鎌倉時代（1185～1333）の神社の記録に楼門が記載されています。現在の門は 1628 年に建設され、国の重要文化財に指定されています。

楼門の前には、御物忌川にかかるアーチ型の玉橋があります。この朱色の玉橋は、特定の祭りや宗教儀式の際に神職や指定された参加者のみが使用するため、参拝者が本社の区域へ行くためには近くの橋を渡る必要があります。